

---

# ありきたりな僕等の。

蜜月 & りえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ありきたりな僕等の。

### 【Nコード】

N1361E

### 【作者名】

蜜月&りえ

### 【あらすじ】

倉本愛（14）は若葉中学、ソフトボール部キャプテン。赤西誠（14）の事が好き。それなのにある日誠の双子の弟、郁に期限付きの賭けを持ち掛けられて・・・？

## 1話 僕とあたし

夏のような暑い日 若葉中学のグラウンドは今日も活気づいていた。

カキーン

「おーい そんなんじゃ次の試合勝てないよ!」

倉本 愛くらもと あい（14） 若葉中学、ソフトボール部キャプテンです。

「もう一発いくよっ」

そういつて茶色に薄汚れたボールを投げかけたとき足元に1つボールが転がってきた。

「すいません・・・あ」

「あ」

「なんだ愛じゃん」

「誠!」

赤西 誠あかにし せい（14） 野球部のキャプテンであたしの幼なじみ。野球

球をやって いるのも誠が野球をしていたからなんだ。

あと、あたしにとって誠は

「野球 がんばれよっ」

あたしの好きな人

わわっがんばれよっていわれちゃったよ はずい・・・めっちゃ  
はずい!! 今顔赤くならなかった

よね!?

そんなことを考えているうちに誠はいつてしまった・・・。

「せん・・・」 「せんぱ・・・」

「せんぱい!!」

あっヤバぼーとしてた。

「ゴメン今なげる!」

更衣室 今日誠に言われた言葉が頭の中で鳴り響いてる。

「おつかれ」

そういつて更衣室を出た。

誠に言われた言葉のことを考えてるうちにいつしか誠のことを考えていた。誠とは仲良し、

誠とは幼なじみ・・・誠はあたしのことをどう思っている？ 答えは一つ

「友達」

目の前には幼なじみのかべ。「好き」なんて言わない、絶対に。気づけば緑にそまった桜並木の下を歩いていた。

そして目の前に

「よっ」

誠にいた。

## 1話 僕とあたし（後書き）

この小説は蜜月とりえが二人で書いたものです。

1話ごとに文の書き方など多少変わりますが、楽しんで頂けたら嬉しいです。因みにこの回&サブタイトルはりえが書きました。

感想、アドバイス等ありましたらどしどしコメントを送って下さい。  
とても喜びますv

## 2話 幼馴染の壁はそれはもう高く、重い。

目の前には幼なじみの壁。「好き」なんて言わない、絶対に。  
気づけば緑にそまつた桜並木の下を歩いていた。

そして目の前に

「よっ」

誠せいがいた。

「・・・誠」

「何？どしたの暗い顔して」

「別に！全然っ暗い顔なんてしてないしっ！」

誠の事で悩んでいた、だなんて言えない。そんな事言えたら告白なんてちよるいものだ。

わざと笑顔を作ってみせると誠はほっとした様な表情になった。

「いや、お前さっき先刻赤くなってたからさ・・・。何かあったのかと思」と言いかけた誠の口を塞ぐ。

「いや、全然赤くなっていって！熱かったからだよ！気のせい気のせいッ！！」

「ふ！？んおうふッ」

鼻と口をすっぱりと塞いでしまった誠の顔はみるみる青くなっていく。ぎゃっ、と悲鳴を上げて力が入っていた手を離れた。

「ご、ごめんッ！えと、じゃー帰るねッ！」

誠が何か言いかける前にソフトボール部でみっちり鍛えた足で逃げる。

恥ずかしい！恥ずかしすぎる！！

猛スピードで緑に染まった桜並木の道を思い切り走る。と、同時に桜がビヨウビヨウと激しく散る。もう桜の木は緑色に近い。

そして桜がうざったい程顔に付く。振り払うがしっこく纏わり付いてくる。

「あぁっもう！」

思わず叫んでしまった。そして今まで急スピードに走っていた足が止まって空を仰ぐ様に上を見た。

告白してしまいたい      けれどそう簡単に告白できないのが関の山である。

幼馴染という壁はそれはもう高く、重い。

告白してそれ以上になるとというのが恐い。いや、それ以下になるが凄く恐い。

誠ともう喋れなくなったら      ……と考えると胸がチクリと痛んだ。

「なーに悩んでんの？純情娘？」  
「な」

ひよこつと後ろから誠が      じゃなくて誠の双子の弟、赤西郁あかにしいくだ。因みに一卵性の双子で顔がとってもソックリなのにとっても性格が似てない。小説とか漫画とかで出てくる良くあるパターンだ。そついうのは双子が主人公を取り合うとかどっちが好きなんだとうとか純情っぽく悩むみたいないなありきたりな設定だが（いやあたしの恋も充分ありきたりだけど）、そついうのは絶対無い。

あたしが好きなのは誠だ。

この馬鹿で毒舌どくせつな男は好きにはならない。そして誠と同時に郁とも幼馴染なのだ。

「純情娘つてそついう時期なのツ！純情で悪かったなツ！！」

「ふーん・・・誠の事好きなんだやっぱ」

見透かした様に誠ソックリの顔があたしの顔を覗き込む。

思わず恥ずかしくなって顔を自分でも分かる程思いつきり逸らした。  
「ち、違ッ！」本当は好きだけどコイツには知られたくない！という反感から全く逆の答えが口から飛び出す。

「じゃ、俺と付き合ってくれるよね？」

思考が固まる。

そんな瞬間を狙ったのかどうなのかスルリと郁の手がうちの体に回される。世間ではこれを抱きしめたというのか。

それにしてもどうして誠が好き？ 違う 俺と付き合えになんのコイツは。かなり魂胆がミエミエだ。

「離せつつの変態タラシ男ッ！」

鍛え抜かれた自分の右手が郁の首筋にチョップを食らわす。鈍い音がして郁のう、という呻きと共に自分に回された手が緩む。その隙を狙って最後の止め 腹に勢いよく蹴りを入れた。

ゲシッ

「痛っ………！」

「ふん、ザマーミロ」

郁はしゃがみ込み腹を摩りながらいてて……と呻いていた。たとえば好きな人の弟であり、どんなに顔が似ていても容赦はしない。

「乙女に抱きつくとは何事ッ！？ 誠とは大違いッ！」

「なッ……誠とはと言うなっつもの！ そういうお前は好きなんだから兄貴の事！」

「ああ好きだよッ！ あんたとは大違いね……ってあれ？」

思わず口が滑った。

郁の顔が少し歪んだ様に見えた様な……と思ったら気のせいだ。郁はゆっくりと立ち上がった。

「じゃ、賭けしてみない？ 期限は一ヶ月。愛が兄貴と両想いになれば愛の勝ち。で、なれなかったら負け。お前が負けたら俺と付き合ってね」

「ちょッ……勝手に決めないでくれる？ 大体あんたと付き合うなんて……」

「自信ないんだ？」

プッ

自分の何処かの線が切れた音がした。言ってくれたなコイツ！

「いい！ やるッ！ その代わり郁は負けたら、何でもいう事聞いても



らうからねッ！」

「じゃ、頑張つてね」

「生憎言われなくても頑張る主義ですんで！」

こうして、この日から期限付きの郁とあたしの賭けが始まった  
・・・。

## 2話 幼馴染の壁はそれはもう高く、重い。（後書き）

サブタイトル&2話は蜜月が書きました！。2話の方が若干読みにくいかと（泣

で、愛の一人称は「あたし」なのですが時々間違っているかもしれない  
ません^^;

感想、アドバイス等ありましたらどしどしコメントを送って下さい

v

### 3話 お泊り会ッ!?

期限付きの賭けかぁ・・・。

あたしはぼうつとしながら帰り道をてくてく歩いていた。夕日が眩しい。

勢いにのってあんな賭けをしてしまうとは・・・。あたしって危ない奴だな～・・・。

そんな事をぼちぼち考えている間にも第三公園の前にまで来ていた。第三公園とはそのまんまの意味の公園で、第一も第二も無いのに第三公園があるのはこの町のミステリーだ。  
ブランコだけしかない公園。

あたしはぼうつと熱に酔った様に見ていた。

・・・懐かしいなあ。

ぼうつとそんな事を考える。昔よく誠せいや郁いくと遊んだ公園だ。あの頃は楽しかったなあ・・・。

自然と足が公園へ進む。そして自然とブランコに腰掛けていた。

足を不自然に曲げなければ上手く座れなくなっている。そんな事すら成長したんだな、としみじみ思っていた。

・・・。

・・・。。

・・・。。。。

・・・平和だ・・・。

のんびりとそんな事を考える暇さえ出来てしまう。これこそ公園ミラクルだ。幻に近い。

賭けも勝てばいいんでしょ・・・、と思う。頭がぼー・・・と  
していた時・・・。

「誠ッ!？」

公園の目の前に誠がふらりと現れる。行き成りの出来事に絶句した。

誠は「あ」と声を小さく漏らしてあたしの方を向く。夕日のせいで逆光で黒くみえる。

「どうしてこんな所に・・・」そう言いながら誠の方に駆け寄る。この公園とは真逆の方向に誠の家がある。それなのにどうして、と思つて今更ながら気づく。あたしが正解を口に出す前に誠が口を開いた。

「いやー・・・俺、此処ココが何処どこだか分からなくなっちゃってさあ・・・

「やつぱり・・・」

声にもならないため息がでる。

はつきり言うとな誠は超超方向音痴だ。

何処でも迷う。地図があつても迷う。2択でも迷う。道なき道をさ迷う。

でもそんな所が好きなのだ。あたしは。

あたしは公園ミラクルで誠の方向音痴の事をすっかり忘れていた。恐るべしミラクル。と、誠の手元にある地図に目を移す。

「誠・・・地図があるでしょ・・・?」呆れながら、そして無駄な質問を誠に投げかける。

「ああ、これ?何か知らないけどこの地域が載っていないんだよ。何でだろうな?」

と、手元に持っていた地図をあたしに見せる。受け取ったあたしは絶句した。

「・・・これ、世界地図じゃない・・・」

「え?マジ?・・・いやー・・・何でだろうなあ・・・。言つとくけど俺は迷子じゃないよ?」

「迷子だろうがッ！」

「・・・ふう。何も分かつちやいないね愛は。俺の進む道に迷いないッ！きつとこの地図が広すぎただけ！だから迷子じゃな」

「迷子だ」

あたしはキツパリと言い放った後、そういえば・・・と気づく。  
賭けてたんだった・・・。

「誠」

「ん？」

暫くの沈黙。

「あたし・・・誠の事がッ！」

一旦言葉を切る　　と同時に言うんだあたしッ！！

「なーにやってんの二人とも？」

ひょこつと何処から現れたのか誠とソックリの顔が誠の後ろから飛び出す。

「ぎゃわッ！！い、郁？」

「また会ったね」

双子の弟・・・郁はニコツと笑う。コイツは何処から出てきたんだ！神出鬼没かッ！

あたしは心の中でつつこみをしていたが口が回らない。パクパクと魚の様に動かすだけ。だって今誠に告白しようとしていたんだから・・・。

「何やってんの愛？魚のモノマネ？」

分かりきった顔であたしの方を見る。分かてるくせにッ！と顔が熱くなる。

「ち、違ッ！今あたしは誠に・・・」

「誠に？」

「・・・せ、い、に・・・」

い、いえない。

だって誠の事が好きだ、なんて人前で言えたらもう言えてるし。それなのに郁はニヤニヤとした笑いであたしに尋ねる。

「何でもないッ!！」

ああもう恥ずかしいッ!！最悪ッ!！!！!！

「・・・じゃ、もう帰るね」

あたしは踵を返して歩き出そうとすると、

「?・・・行くの?」

「え?」

誠がぽつりと呟くように言う。行こうとしていた足がピタリと止まった。

「明日土曜だし、」

「うん?」

「泊まっていかない?家に」

「うん?」

賭け1日目にして・・・、

チャンス到来!?(なのかどうなのか

とにかくあたしは誠の家でお泊まり会?をする事になったのだった・  
・・。

### 3話 お泊り会ッ！？（後書き）

この回は蜜月が書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1361e/>

---

ありきたりな僕等の。

2011年1月8日02時11分発行